

---

# True Night

如月 琴李

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

True Night

### 【Nコード】

N5694Y

### 【作者名】

如月 琴李

### 【あらすじ】

月夜に翻る黒い装束、銀色の仮面、人は彼を怪盗黒猫と呼ぶ。ただ、ある冬の日の夜いろんな偶然が重なって、不幸を呼ぶ存在だとな乗る彼と出会った私は、どうしてもその姿を憎めなかった……。でも私は、どこの誰だかわからない怪盗のことなんか考えてる暇ないの。8年間ずっと顔を忘れた「彼」に会いたいから。見つかるかどうかわからなくても会えると信じてずっと生きてきた。だからその時まで、まだ知らないでいたい。……結論として王道を突っ走ってるどこか遠い外国の意固地な二人の物語です。（閉鎖サイトから

の転載になります)

## 1・暗い影の訪れ（前書き）

若干見切り発車かもしれませんが。妄想が止まらなかったんです。ということに興味しか入ってませんが、頑張ります。暇つぶしにでもしてください。

## 1・暗い影の訪れ

丸い月に暗い闇。浮かび上がるは黒い影  
その姿を見たものは皆、彼をこっ呼んだ。

「黒猫」 と

黒猫は避けて通れ

誰が初めに言ったのか、この世にそんな言葉のある 時代の中  
で。

\*\*\*\*\*

記憶にうつすら残っている微かな思い出。  
顔は思い出せなくてもずっと何かが頭をとりまいていて。

『帰ったら聞いてくれ』

声変わり前の少年のアルト声は……今も忘れない。

\*\*\*\*\*

「……きな……い……起きなさい……起きなさいってばっ！」  
そんなこと言われても無理だって。どう考えてもベッドの気持ち  
よさって犯罪だと思う。あの暖かさとぽかぽかさは他のどこに行っ

ても体感できるものじゃないもの。

だからなかなか出られない。出なければ何にも始まらないと分か  
つていても、今の季節、つまり冬にここから出るには、人間の樂園  
追放と同じくらいの覚悟がいると思う。いや、実際どうなのかは知  
らないけど。

「起きなさい!!」

だからこの暖かさをみすみす手放す気にはなれないって。かとい  
って起きなければ

バフツ

こうやって布団を引っぺがされるのだ。既にいつもの事だけれど、  
急激にふんわりした毛布の柔らかさと一緒に、体を取り巻いていた  
暖かさまで一瞬でなくなる。これ、まだ私だからいいけど、老人に  
やったら確実に心臓止まると思うよ？

「ほら早く起きてリーラ」

体を貫く寒さに耐え切れずに瞼をうつすら開けたら………傍にい  
たのは大好きな人。勘違いして欲しくないから言っけど女性だ。で  
も朝一番にそんなに思考は働かない。

「ラルタ……………どうして起こしにくるの……………ねむいー」

つい起き上がりながら、突っぱねるようなことを言ってしまう。

……………ごめんなさい。でも

「だってあんたが自分で起きるの待ってたら日が暮れるから」

この人も口の悪さには定評あるからまあいいかって思う自分もい  
る。

「……………それは酷いんじゃないの？」

「本当のことでしょう？」

「……………」

ここまで言われても否定できなかった。

そして、そんな何も言い返せない私の頭の上から、更に降ってくる容赦のない声。

「いい加減にその寝坊癖直さないと、社会に出て困るわよ？」

「一体何年先の話よ。大体……ふあ……今日日曜日でしょ？」

カレンダーを見ながら伸びをして、あくびをする。確かに今時刻は9時で結構な寝坊ではあるけど、日曜日位いいと思う。

「そうよ。でも今日みたいな重大な事件があった日に暢気に寝てるなんて馬鹿のすることよ」

「へっ 重大事件？」

するとラルタは急に私の目線に合わせるようにかがみこむ。そして真剣な面持ちでゆっくりと告げた。

「……この町に 黒猫が現われたの」

「は、はあああ！……！！……！！」

完全に目が覚めた私はベッドで座ったまま器用に数センチ飛び跳ねていた。その単語には嫌な意味での聞き覚えがあった。

大体黒猫なんて不幸を呼ぶ名前にいい聞き覚えがあるわけもない。「シャットさんの家を昨夜荒らしたって」

「……で、捕まったの？」

「捕まったら私は日曜からこんな風にあんたを起こしに来ないでしょう」

「……………確かに」

『黒猫』……今のご時世その名を知らないのは、よっぽどの世間知らずか、世捨て人かつてぐらい話題沸騰中の人物だ。でも彼はアイドルや絶滅しかけの貴族じゃない。荒らしまわる捕まったと言っ言葉から推測して欲しい。信じられないかもしれないが……………怪盗なのだ。

人呼んで怪盗黒猫。

かの有名な怪盗アルセーヌ・ルパンの手口がどれほど鮮やかでも、所詮それは小説の話。黒猫は、今この時代に実際にいて、様々な町の闇に出没し……鮮やかな手口で金目の物を奪い去って、消えていく。まさに神出鬼没の大怪盗。ただし彼は小説で読んだ他の怪盗のように予告状は出さない。だからどこに現れるか分からない。それが理由で一部の人は怪盗の美学に反するとか何とか言ってるらしい。ただ、私個人の意見としては、もしあったとしても結局捕まえられるんだから無駄だと思う。その小説がそうで、無駄な労力っていう言葉がぴったりだった。

それでも彼が怪盗として名をはせているのは、その姿形が泥棒といたにはあまりにも特殊すぎるせいだ。見た者が一様に声をそろえるその格好は、真つ黒なスーツにマント、加えて顔の上を覆う銀色の仮面は性別すらも判然としない幻想的な空気を醸し出している。

ちなみに彼に黒猫と名付けたのは、世間の人々だったりする。月夜に浮かびあがる黒い姿と、闇の中を飛び交うあざやかな身のこなしは猫のようであり、さらに狙った家には必ず損失をもたらすのでと誰ともなく言いだして、定着したらしい。美術館や、宝石店は一切襲わず、個人邸宅ばかり狙うのも特徴で、それも決まった住処を持たない野良猫を連想させる。だからこうしてラルタが私にわざわざ報告に来るのだろう。

「この家にも入るかもしれないわね」

現に溜め息をつきつつラルタが窓を見つめていた。この家は、豪邸とは言い過ぎだが、住みこみメイドや警備員もいる立派な邸宅だから、その心配はよく分かる。

「……………その時は私が捕まえるから安心して！」



そして私はそんなつもりなんかなかったはずが、いつのまにかものすごく勢い込んでいた。まあ無理もないかと自分に言い訳をして深呼吸して落ち着いているとラルタがふっと笑った。

「……………リーラ。気持ちは分かるけどね。あんたは女だから、おとなしく警察に任せたほうがいいわ」

「な！ 馬鹿にしてるラルタ！？ 私だてに体鍛えてるわけじゃないのに！」

一応小さい頃から一生懸命剣だの、格闘技だのやっているのはこういう時に一矢報いるためなのに。なんで頼ってもらえないんだろう。

「……………別に馬鹿にしてるわけじゃなくて。あんまり無理させると父様や母様が心配するのよ」

「ついいもん別に。自分の身くらい自分で護れるし」

「それだけじゃないんだけど……………」

ラルタは溜め息をついて私を見る。いったい何が言いたいんだろう。

「まあいいわ。ほらさっさと着替えてご飯食べに降りてきて。ものすごくメイドたちが困ってるの」

そう言って部屋を出て行った。

「はいはい……………悪うございました」

ラルタの消えていった扉を見ながら呟く。

本当は私は、メイドさんに何かしてもらえる身分ではない。でも人に迷惑を掛けることはできない。

私は沈みかけた気分を変えるために伸びをして周りを見渡した。目に映るのは結構な値が張る家具達だ。それは私がラルタから『借りて』いるものだ。期間はもう十年近くになるけれど名目上はそうなっている。

ベッドから出るとパジャマを脱いで、等身大の鏡に映る自分の姿を見た。スタイルは無視するとして、肩まであるこげ茶色の髪に緑

の瞳の少女がこちらを見つめ返している。

どうみても異国の血が入っているこの瞳。そして青い宝石のネックレスがちゃんと首に掛かっていることを確認した。私がこの家に来た時に、初めてプレゼントされたものだ。

これだけは、無くすわけにはいかない。

あの日

口が悪いながらも優しいラルタがもしも必死に彼女の両親に『引き取って』と頼んでくれなかったら。私も彼と同じく今頃は遠い孤児院行きだった。

そしてこんな不自由ない暮らしなどできるはずもなく細々と過ごす日々だったはずだ。

ただ、その『彼』が誰かは、もう思い出せないけれど

顔も名前も忘れてしまった。既に残っているのは一緒に過ごした時間と、傍にあった温もりと彼の不器用な優しさだけ。

いつかラルタに『それ初恋でしょ?』と言われたけれど、どうなのか分からない。それはもう私の中に『思い出』としてあるもので小説を読んだ時の主人公の言葉のような、胸をさす感覚や心臓が止まりそうな感覚や、ぼうつとしてしまって食事も喉を通らないとかいう感覚は全くないから。あるのは……

ほんわりとした暖かさと、胸に甦る寂しさ。けれどそれを時間という一瞬一瞬厚くなっていくベールがどんどん被さって、見えなくしていく感覚ぐらいだ。

本当のところもうこの思いがどういうものなのかも分からない。でもそれでもいい。きっともう出会うことはないのだし、もうす

ぐ忘れてしまふのだと漠然と思うから。

8年も経った今いくら会いたくてもそれは無理なことだと感じている。

中身のなくなった暖かさだけを残して思い出に変わってしまった記憶なんか

私なんか忘れてる気が……そうっ 自己紹介っ！！

別に今までの流れから、私がリーラで、親友がラルタだというのは分かっていると思うけれど、少しだけ聞いて。

っていうのも、実は、私の名前はリルト・アンテールだから。でもラルタをはじめ、本名を呼ぶ人は私の周りにはいない。口が回りにくいからと、皆リーラと呼ぶ。そのせいで時折本名を忘れ去られるけれど、私はこの呼び方を結構気に入ってるからあまり気にしていない。

ところで、ラルタのフルネームはそのままラルタ・ディロット。

そして、私とラルタの名前が全くかぶっていないのは……あの日以降、私がこの家でよく言えば養女、悪く言えば居候の形をとっているからだ。ラルタの家はお金持ちで、一人増えたからって全く問題ないほど裕福だから、という理由でお世話になっている。

感謝してもしきれないけれど、その経緯については今は置いておく。またいずれ話す機会もあると思うから。

ちなみに、彼女と私の年は同じ。ただ、生まれたのは私より1ヶ月ほど早くて、今は名実ともに私よりも年上。彼女は私と違ってクールでめったなことには動じない。さっきみたいにお姉さん気質を私に向かって発揮するのはしよっちゅうだ。勿論それが嫌ではないし、私はラルタが大好きで、本当に今をこれ以上なく幸せだと思っているから。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

着替え終わってからなるべく静かに部屋を出た。だが、出来るだけ音を立てないようにしていたにも拘らず、私が階段を降りる音を耳ざとく聞きつけたらしい。

「遅すぎリーラ。どれだけ着替えに時間かけたら気が済むの？」

食堂にいたラルタからいきなり毒舌が飛んで来た。ちよつとむつとしたけれど、だいぶ時間が経っていたのは事実だ。

「ごめん。ちよつと考え事してて……………」

座りながら素直に謝ると、彼女はその唇に薄く笑みを浮かべた。

「また『彼』？」

そう言われれば私はどうしても恥ずかしさに頬が熱くなるのを抑えられない。こうして誤解されていくのだ。

「ちよつ違うつて」

「凶星ね」

表情はあまり変えないながらも、楽しそうに言うラルタを見てみると、つい自分っていいカモなんだと思ってしまう。勿論ラルタは獵師だ。けど、このままはちよつと悔しい。

「…………あのねえ『彼』はもう思い出の住人だって何度も言ってるでしょ？それにラルタはそういう人はいないの？」

逆に聞いてみた。すると彼女は僅かに楽しそうだった表情を一瞬でひっこめて私を睨みつけてくる。

「いる訳ないでしょう？」

即答の上に疑問形。いや聞かれても困るんだけど。答えは分かるにしてもね。

思い切って私は話題を引っ張ってみることにした。

「でもラルタって、そんなに綺麗なんだし…………ファンも多いし…………彼氏ぐらい作ればいいのに……………」

「…………嫌よあんな下等生物」

「…………今、世界中の半分の人を敵に回す発言したことに気付いてる

？」

あんまり辛辣な言葉を一応確認する。

「それが何よ？」

ラルタは表情一つ変えないままにコーヒーにミルクを入れている。しかもまたしても疑問形。答えは見えたけど今度は答える気がしない。私の完敗だった。

「もういい……」

「そう？」

ラルタは他に類を見ないほどの男嫌い。本当につくづくもったいないと思う。

なんてったって黒い瞳に黒い髪の、女の私でもうらやむほどのラテン系のもので、すごい美人で、おまけに頭も良くてお金持ち。性格はちよつと問題あるけど。でも本人が『下等生物』って言うてたんじやどうしようもない気はする。それにしても、この世には男と女しかいないって事ちよつとは分かってもいいと思う。

そんなことを考えていたらいつの間にか何もなかったテーブルに朝食の用意が並べられていた。

私は傍にいたメイドさんに『ありがとう』を言つて、実は空腹を我慢していたお腹を片手で押さえ、パンを手を取った。お腹が鳴るのがマナーに反するってことぐらい知っている。

既に朝食を食べ終わっていてやることがないのか、ラルタは私の正面でコーヒーを飲みながらくつろいでいた。

断っておくけれど、どこかのお城のように二人の距離がものすごく開いてるって事はない。ラルタはお嬢様だけど、デイロツト家の人々はみんな仲が良く、団欒を大事にしている。だからテーブルも4人家族の標準サイズで、大体2メートル位かな。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

それから15分後、私はかなりへこんでいたらしいお腹を漸く満足させて、食事を終えた。

「そういえばね」

その矢先のことだった。珍しいことにラルタが自分から話し掛けてきた。

「な、なに？」

少し驚きながら答えるとラルタは真面目な顔で聞いてきた。

「今まで黒猫が来るのに予告状が来たって話聴いたことある？」

唐突な話題。しかもまた黒猫のことだ。私は即答しようとしたけれど、一応目を天井にやり、覚えている限りの新聞記事の文面を探つてから答えた。

「……………ない」

「そうよね。私もないもの」

「大体そうじゃなかったら、シャットさんの家が泥棒に入られるなんてないと思うけど？」

あの家は自他共に認める富豪の家なので、そういう警備には特に厳しいのだ。もし何かあればきつと警備する人数が倍になっていたはず。私の言葉にラルタは大きく頷いた。

「ええ……………でもね。予告状の代わりにあつたらしいのよ、不思議な出来事」

「どんな？」

きつと私が起きる前に収集してきた情報なのだろう。ラルタは私と違って早起きだから。

「黒猫に入られる3日前にね。シャットさんの奥さんが出かけたときに……………見るからにぼろぼろの孤児に会つたらしいの」

「孤児？」

その単語に思わず反応してしまう自分に少し嫌な気分になった。でもきつと一生変わらないのだ。

ラルタはそんな私に構わず話を続ける。

「そう……で、その孤児がいきなりシャツトさんの奥さんの……洋服の袂を掴んで瞳を見つめてこう言っただけですって」

『お恵みを、わずかばかりのお恵みを』

「……って」

「……そ、それで？」

思わずつばを飲み込んで、私は先を促した。

「勿論シャツトさんの奥さんは……怖くなって逃げたらしいけど」  
言い終わるとコーヒーを一口すすする。

「や……道歩いてて、普通そんな言い方されたら絶対怖いと思うけど、中にはあげる人もいるんじゃない？」

私なら絶対躊躇わない。

「まあ、恵む人もいると思うけど……奥さんなら……多分駄目でしょう。去るときにおそろおそろ振り返ったら、その孤児が彼女を物凄い目で睨んでたらしいわ。声は聞き取れなかったらしいのだけど……その口の動きは」

『汝に不幸があるように』

「……って言っているように見えたって」

「………そ、それって」

かなり怖い話だ。でも、言われて少し考える。この話、筋は通っているし、もしこれが奥さんじゃなくてシャツトさん自身だったら結果は変わっていたと思う。なぜなら彼は誰もが認める『いい人』だから。

けど、身分を気にする人もその家には多く彼の奥さんもその一人だからラルタはご丁寧にもいつも『の奥さん』ってつける。彼女なりの敬意の表し方だ。

「で、盗まれたものは……………奥さんのイヤリング。50万のね」

「……………」  
あながち自業自得と言えなくもない。

「その話を聞いた警察は、その孤児が怪しいって踏んでるみたいなんだけど……………その子の人相がコートに目深の帽子。しかも全部黒ずんでるからよく分からないらしいわ」

それはまた用意周到なことだ。

「その子、黒猫とグルなのかな？」

ラルタに聞いたって分からないだろうに考える前に聞いていた。大体彼女の話は全て伝聞形だ。

「そうだって意見が多数出てるわ」

「じゃあラルタがもしそんな子にあつたら、ちゃんと何かあげれば問題ないのよね？」

そうすればいくら裕福でも、この家に危害は及ばないはず……………。  
するとラルタは何故か目を伏せた。

「……………多分」

「どうして？」

「だってね……………今までの町でどうしてその話が噂にならなかったのかは知らないけど……………今はこの件はもう町中の噂だわ。これを聞いた人は確実に彼らに何かを与えるでしょう。そうすると真意は分からないから　彼らは一日おきに町を変えなきゃならない」

いつだって論理的なラルタ。頭の回転もすごく速い。そして確かにその通りだ。

「つまり、彼らはそうとは悟られないようなことしてくるわ。きつともっと大胆なこと」

「大胆なこと？」

思わず聞き返してしまう。さっきの事だって結構大胆だと思うん



ただどこれ以上何をするつもりなんだろう。

「たとえば……いきなりひったくるとかね」

「……犯罪じゃない」

いくらなんでもそれとは思う。けれど更にラルタは確信を持って続ける。その瞳は感情がなくて怖い。

「あら、もともと犯罪者じゃない。大体人の器を図るならこれ以上の事はないと思うけど？ その人が盗られても気にしないかどうかってね」

「いや、それ誰だって怒るって」

「じゃあ孤児なら？」

じつと何かを促すかのように私の瞳を見ってくるラルタ。でも私はどう答えたらいいんだろう。彼女にその気がなくなつて、どうしても重い気分になってくる。

「……………」

答えられずに黙ってしまった私を見て、急にふっと視線をずらし、ラルタは時計を見た。

「リーラ……今日私買い物行かなきゃならないんだけど……あんたも来る？」

これはつまり……………お誘いだ。ラルタと出かけるなんてどのくらいぶりだろう。一瞬で嫌な気分も吹き飛んだ。

「行く！」

満面の笑みで告げた。するとラルタはそんな私を呆れ顔で見て、「ねえ犬耳と尻尾しまったら？」

とだけ言った。

「？」

訳が分からず、首をひねる。私そんなもの付けてたっけ？

## 1・暗い影の訪れ（後書き）

お読みくださいますと、ありがとうございます。

## 2・後悔したってもう遅い

「いい天気ーやっぱり買い物はいいよね！」

ファッション関係の店が並ぶ中心街のメインストリートを歩きながら、茶色いコートにお手製の青いマフラーに同じ色の手袋姿で普通より大分重い両腕を上げながら横を振り返った。

「分かったから少し落ち着いてよ。初めての子連れでるみたいで恥ずかしいでしょ？」

でも、緑色のコートと白い手袋、白いマフラーを着たラルタからは、相変わらずのお言葉が返ってきた。

「……ごめん」

自分でも少し子供っぽすぎた行動を反省していると、ラルタは聞いているのかいないのか傍のショーウィンドウを覗いている。

「全く……あらこのリボン可愛いわね」

「えーラルタには似合わないと思うけど」

すぐに気を取り直して、覗き込んで相槌を打った。

ラルタが見ていたのは白いリボン。レースや飾りのないシンプルなもの。ただ、ラルタはショートヘアだから髪につけるならバラとかビーズとかそういう華のある形の方が似合う。要するにリボンって感じじゃない。だからそんなことどうして言うのか分からなかった。

「あんたによ……」

ラルタがぼそつと言ったその意味を考える。でも考え終わる前に私はラルタに笑いかけていた。

「ありがとう！」

こういうとき自惚れかもしれなくてもラルタは私が大好きなんだって思えてすごく嬉しい。ラルタがこんなふうに言葉にしてくれるのって珍しいことだから。今日は本当にいい日だと思う。

「あーはいはい離れて」

そのまま腕を組もうとしたらはたかれた。

腕くらい組んだっていいじゃないとは思ってたけれど、やっぱり子供っぽくて呆れたんだろうか。

「……………」

私が思わず黙り込んだそのときだった。

ドンッ

衝撃と共に体が前のめりに傾いた。いきなりのことだったから、一瞬何が起こったのか分からなかったけれど、持ち前の運動神経で急いで体勢を立て直しなんとか転ばずに済んだ。

何かが私たちの間に無理に割って入ったんだろう。隣には運動神経があまり良いほうじゃないラルタが倒れていた。勿論何とかしなくちゃと思ったんだけど、私はラルタが倒れる前と後とで何かが変わっている気がして仕方がなかった。

「リーラ、バッグッ」

そう言われて、ようやくラルタの紺色のバッグがなくなっていると気が付いて周りを見回すと、それは少し先に立っている見知らぬ少年の手にあった。

「なっあの子！」

見た瞬間に瞬間的に足が動いていた。

ラルタが止めようとしていたけれど聞こえないフリをする。

「待ちなさい」

大声で叫んで走り出した。すると少年は我に返ったように逃げ始める。

これ、ひったくりだ。順番は逆だけれど追いかけているうと思っ

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

「ちっ……すばしっこい」

必死で追いかけているし距離も確実に縮まっているけれど……  
…その少年は身軽さを武器にとんでもない逃げ方をする。木の上にいるかと思ったら、裏路地に駆けていくし、そうかと思えば屋根の上だ。

「はぁ……はぁ……待ちなさい！」

おまけに見失わないように律儀に少年と同じルートを通るのでいい加減息も切れてくる。しかもコートの下で首に下げたネックレスがかつかつ鎖骨に当たって痛い。

取ればいいんだろうけど、これをなくしたら本当に大変なことになるから、今までお風呂の時以外は外したことはない。錆びてしま  
うから。

だから今も外す気はなかった。

「このぐらいの額恵んでくれたっていいじゃない、わりとしっこいんだね」

裏路地を曲がった時、何故か逃げずに目の前にいた少年が挑戦的な目を向けていた。

顔は路地が暗いからわからないけれど、見るからにお金のなさそうな身なりで、ひったくりが生活にとって必要だったと語っているけれど、そういうわけにはいかないのだ。

「駄目よ！ それはラルタの大事なもののな。」

他のものならいざ知らず、これは彼女の両親からの大切な誕生日プレゼントだ。

「ふーん。あんなに裕福なのに心は狭いんだね」

「！！！！！！」

なんつつ事を言い出すんだこいつは。思わず少年を睨みつけた。  
すると彼の唇がゆっくりと動いた。

『汝に不幸あれ』

そんな音が、聞こえた。

「なっ」

しばらく状況理解に勤めて……やつと我に返った。

今朝のラルタに話を聞いたばかりだったというのに。私、もしかなくてもとんでもないことをやっちゃったんじゃないだろうか。

「ちよつと……あんたまさか」

震える声で問いにならない言葉を発する。少年は歳に似合わない含み笑いを浮かべた。

「きつとお姉さんの考えてる通りだよ。不幸が訪れる」

直感的にその意味がわかってぞつとする。

「だめ！　お願いそれだけはやめて！」

「……駄目だよ。こつちの不手際だったとはいえ、お姉さんはもう知ってるんだから」

有無を言わせない少年の言葉。不手際ということは……やっぱこの話が漏れるのは、予想外ということなんだ。いやそれよりも、どうして自分より大分歳下のこの少年の方が、有利に事を進める空気をまとってるんだろう？　なんかこの子、得体が知れない。むしろ……怖い。

「それは……大事な人の父親からの誕生日プレゼントなの！　だから返して！　代わりにこれをあげるからっ」

でも、こればかりは譲れない。これをなくしたらきつとラルタとっても悲しむから。だからここは精いっぱい頼んでみるしかない。一か八か、自分のしていたマフラーを差し出した。首筋が急に寒くなったことは気にしないようにして一步一步少年に近づく。

「きつとこれで、寒さはしのげるから……だから……お願い手を出さないで……私の大切な人の幸せ……壊さないで」

そのときの私は恐怖も忘れて必死だった。少年の首にそれを巻い

てやると彼の瞳が少し優しくなった。

「……………話してみるよ」

彼が言ったのはそれだけだったけれど、誰にかっというのは分かった。

少年はラルタのバッグを私の手に押し付けると、数歩距離を取った。そうなつてから、見るからに孤児らしいみすばらしい格好なのに、あんまり不潔な感じがしなかったことに気がついた。けれど無意識に少年に近寄ろうとすると、彼はにっこりと笑った。毒気を抜かれて思わず足が止まってしまう。

「じゃあねお姉さん」

「あ……………」

そしてその隙を逃さず、そのまま駆けていった。と思ったら振り返った。追いかけても捕まらない距離で。

「ねえ、名前なんて言うの？」

ターゲットって事ね。そう思って諦めながら短く答えた。

「リルト」

言っただ途端に少年は目を見開いた。

その意味は、私には分からなかった。けれど彼のその目は焼き付けるかのように私の全身をじっくり見ている。特に私の緑の瞳を。そしてまた唇が動いた。

「……………汝に不幸あれ」

そう言っただけは一度も止まらずに、走って行った。

「な、なんなの……………よ」

私は思わず、その場にへたり込んでしまった。なんだかもう、いっぱいいっぱい、張り詰めていた糸がぷつんと切れたように。

「リーラあんだどこまで行つてたの？　ってマフラーは？」

絶望的な気分歩いてラルタの元に帰ると……彼女はいきなり私に駆け寄ってきた。けれどその問いには答えず、バッグを差し出す。

「……はいラルタこれ」

けれど、ラルタは受け取るうとはせず、代わりに私の肩にそっと手を置いた。

「……少し休んだ方がいいわリーラ」

「うん………ありがとう」

促されるままにラルタと一緒に近くのカフェに入った。

そこで勝手にラルタが注文した大好物のカプチーノを飲んでいると、唐突にラルタが黒い瞳を私に向けてきた。

「あんたあのマフラーどうしたの？　すぐ気に入ってたじゃない」  
「忘れ去られていなかったことにどう答えていいか一瞬迷ったが、  
丁度窓の外に木枯らしが吹いて葉っぱが風に舞っていたのが幸いだ  
った。」

「えっえーつと追いかけてるうちに風で飛んじやって。追跡中だったら、諦めたの。あーあ、また編まなくちゃ」

まさか私があげましたなんて言える訳がない。でも私は演技が下手だから、きつとラルタには見抜かれているんだろうな。

「ふーん」

彼女の瞳は揺れていて、やっぱり半信半疑らしい。私は話題を逸らすことにした。

「ね、ねえラルタ……その、中身ちゃんとある？」

ラルタの膝に乗ったバッグを指さすとラルタは私を見て、次にはチャックを開けて中身を一つ一つテーブルの上に出して確認を始めた。そして数分後。



「ええ……何一つ盗られてないわ」

落ち着いた声でそう言われ、漸く私は緊張が解けていくのを感じた。

「よかったあ」

安堵の声が自然と出た。カプチーノをまた一口飲むとやっと飲んだ心地がしたくらいだ。甘くてそれでいてほろ苦いこの味が昔から大好きで、飲みたい時にくれるのは本当にありがたいことだなと、思ったら、店に柔かい音楽が流れていることにも気がついた。

どうも相当動揺していたみたいだ。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

やがてラルタは少し長めのトイレに立った。そして帰ってくるなり、椅子にかけていたバッグを持った。ずいぶん長居していたからショッピング再開かなと思っていただけ。

「……………そろそろ帰るわよ」

いきなりそう宣言する。なんで提案じゃないのだろう。でも今はそれよりも気になることがあった。

「ら、ラルタはもういいの？」

あんな騒ぎがあつたからまだどこにも行つてない。今日は買い物するつて言つて出てきたのに。

「ええ私は用が済んだからいいわ」

……………はずが。いつ用を済ませたの？

「ち、ちなみに……………なんだつたの用つて？」

聞いていいのかと思ひながらも問いかけると、ラルタはゆっくりとバッグに手を入れた。

「これよ」

それは掌に乗るほどの大きさの小さな白い箱だった。それが私に向かつて差し出されている。不思議に思ひながらもラルタに促され

て、開けてみた。小さな期待をそれと知らず胸に感じながら。

白い外とは対照的な黒い布を下に敷いた箱の中に、丁寧に納められていたのは、さっきの白いリボンだった。

私は、理解が追いつかない。

「こ、これって　「誕生日おめでとうりーラ」

なんとか言った言葉を遮られて、初めて気がついた。明後日は私の誕生日だということに。

どうやらトイレとか言っておきながら店を抜け出て今買ってきたらしい。

「あ、ありがとうラルタ！」

心からの感謝をこめて、大好きな親友に満面の笑みを向ける。するとラルタは急にそっぽを向いた。

「気にしないで。あんたにも……ありがとう言わないといけないんだから」

言う少し顔が赤い。非常に珍しいことにラルタが照れていた。

確かにそれはとても嬉しかったけれど……だからこそ、私は能天気になんか忘れていたことを思い出してしまった。はずんでいたはずの気持ちは急にしぼんでいって、少年の言葉がぐるぐるぐる頭の中に回りはじめて、どんどん肩が重くなる。嬉しかったはずなのに、せっかくラルタが買ってくれたのに、家に帰りつく頃には楽しい演技すらできなくなっていた。

『汝に不幸あれ』

あーもう、どうしよう……。『

ほぼ同時刻、リーラの悩みの種の少年は走っていた。そこは既に道なき道といった方がいかもしれない。裏路地で狭く、彼以外誰もいない。とても殺風景な場所だった。やがて少年はある一角に立ち止まって声を掛ける。

「ただいま！」

その途端、今までどこにいたのかその場の高い塀の上にすっと降り立ったのは……黒い影だった。顔は時刻のせいか、もともとここに明かりが差し込まないせいか、暗くてよく見えない。

「獲物は？」

影から発せられたのは低いアルトの声。

「兄やん。それがね」

少年は先程のリーラ相手のときとは打って変わって彼に幼く甘えるような声で話しかけた。

「なんだ？」

『兄やん』と呼ばれたほうは怖い印象だが、彼の話を聞く気はあるらしい。

「ひったくつたはいいけれど……取り返されちゃった。代わりにマフラー受け取ったけど」

うつむく少年のその首にはしっかりと青いマフラーが巻かれている。

「で、名前は、聞いたの？」

別方向から声がした。この声は少し『兄やん』よりも高い。背の高さは彼と同じ位で少年であることも間違いはないが。

「それが……『リルト』って」

その方向に向かって意を決したように言う。するとわずかに塀の上で黒い影が動いた気がした。

「……」

その意味が分かったのか少年はかなり勢い込んだ。

「ねえ兄やん？ もしかしてもしかするかもしれないよ？ 聞いたとおりの容姿だったし」

「……………まさか」

心底否定するような声。すると更に少年は続けた。

「だって覚えてないんでしょう？ どの街だったか」

「……………」

「どうするの？ あの子の家……………襲う？」

いつでもこの少年が会話を続ける役らしい。

「……………」

しかしそれでも黙ったままの『兄やん』。まるで影のように、立ち尽くしたままだ。

「……………どうする？」

「……………お前は どう思う？」

問われた『兄やん』は逆にそちらを向いて問いかける。相当迷っているようだ。

「俺は……………そうだな。確かめる価値はあると思うよ」

「……………どうするの？」

それを受けて少年がまた聞く。すると『兄やん』は溜め息をついた後で、空を見上げ、誰に言うでもなく呟いた。

「……………始めるか」

低い声が闇に溶けた。まだ太陽が沈むには間があったが、ここだけは既に真夜中のような気配が漂っていた。

### 3・それぞれの時間

一方そんな会話が行われているなんて露知らず。夕食前のディロツト家の一室には綺麗な夕焼けと不釣り合いなほどの暗澹とした空気が充満していた。

「どうしたらいいんだろう……」

リーラは椅子に座って、自室で頭を抱えていた。

「やっぱりラルタに言うべきかなあ」

そう言って立ち上がったかと思えば、

「……………言えないよね」

電池が切れたようにまた座り込み

「私が悪いんだし……」

と俯いて

「はああああ」

頭を抱えるのである。

そんなこんなをさつきから彼女はずっと繰り返していた。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

『汝に不幸あれ』

でも、そもそも不幸って一体誰にだろう？ 言葉の意味を考えれば

は私自身だけれど、この家に、ならばラルタやラルタの両親にも危害が及ぶ。それだけは避けたくて、でも自分ひとりではどうしようもない。だからこうしてずっと悩んでいる。

「ああーどうしよう」

「なにがよ」

「だーかーらー私のミスで近いうちに黒猫がこの家に来るかもって  
ってラルタあ!？」

全部暴露してから、声の主に気付いて悲鳴を上げた。対するラル

夕はいつ入ってきたのか、妙に落ち着き払って私のベッドに優雅に座ってる。

「ふう……こんなことだろうと思った。あんたって嘘つけないタイプよね」

「ご、ごめんなさい」

私はこれ以上下げられないくらい頭を深々と下げた。

「頭を上げなさい。今しなくても、逮捕した後で謝罪はいやというほどしてもらってから覚悟しときなさい」

「……………ハイ」

その凜とした声に従わざるをえない空気を感じて急いで顔をあげる。

「さて、どうしたものかしらね。まず、父様や母様に言わないと。ほらっ行くわよ」

立ち上がって歩き出そうとするラルタに私も立ち上った。

「うん……」

でも元気なんて湧いてこない。ラルタはそんな私の様子を見かねたんだろう。盛大なため息をつかれてしまった。そして息をすうつと吸い込む音がして。

「そんなに気にしてる暇あったらとっとと下降りて、金目の物を隠すの手伝いなさい！」

非常に珍しいことに怒鳴られた。

「は、はいっ」

私は慌てて弾かれたように部屋を飛び出した。

「全く世話の焼ける」

そう呟いてからラルタは部屋を出て行った。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

「ふう……………疲れた」

自室で伸びをしてパジャマ姿でベッドに倒れこむ。青い宝石のついたネックレスに首が押さえつけられて痛かったがもうどうでもよかった。そのくらい疲労困憊している。

あれからラルタの両親に正直に言ったところ、彼らは文字通り腰を抜かした。しかしそれもつかの間、ラルタの声で皆各自のネックレスや指輪を食堂に集め（私とラルタのものはないけれど）、家の地下の金庫に隠した。

けれども幾つあるか分からないほどある壁の絵や置物などはどうしようもないということで、隠す作業は適当なところで切り上げられた。既に金庫はいつぱいになってしまったというのもある。

そしてシャワーを浴びて今に至る。

時刻は既に11時を回っていた。

「でも私が……………守らなきゃ……………責任ある……………し……………」

全て言い終わらないうちに、私の瞼は急激に重くなり、猛烈な勢いで夢の世界に引き込まれていった。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

その少し前、すっかり暗く寒くなった街の空に不釣り合いな影があった。

「……………あの家か」

「うん……………結構もってそうだね」

「……………ターゲットは？」

それは、そんなことを言いながらデイロット家を近くの手ごろな家の屋根から双眼鏡片手に眺めている三つの人影。その一つはあの少年らしく、一つは『兄ちゃん』。一つは高い声の青年だ。だが、三人の顔はまたしても暗いので見えない。

だがその方が発見されにくいから彼らにとっては都合がいい。今夜は月がないのである。

「えつりルトじゃないの？」

『兄ちゃん』が聞いた声に、少年が驚いた声を上げながら彼を見る。

「あいつは金目のものなんてもってないだろう」

即答した『兄ちゃん』に少年は首をかしげる。

「何で分かるの？」

「……………」

彼は黙り込んでしまった。すると少年はぶうと頬を膨らませる。

子供らしい仕草だった。

「もう兄ちゃんはいつも自分の都合悪くなると話終わらせるんだから」

「仕方ないよティム……特に今回は」

横からそんな二人の声を聞いていたのか、仲裁に入る声。

「そんなこといったってね。あんちゃん」

声のしたほうを振り返り、一生懸命自分の正当性を主張する少年ティム。

一方『あんちゃん』と呼ばれた男は夕方会話に参加してきた声の高い青年のようで、返事の代わりに溜め息をついた。

「……もし逢ったとしてもどうすればいいかなんて分からないだろう」

「……………」

その声に黙り込むティム。

沈黙がその場を支配した。

だがやがて、その沈黙に耐え切れなかったかのように、唐突に横で誰かが立ち上がった。

「そろそろ帰るぞ」

その声で、それが『兄ちゃん』だと知れる。

「……はーい」

「わかった」



素直に立ち上がる二人。そして三人の影は瞬く間に闇に消えた。

私は不安を抱え込んで、やっと弧に見え出した細い月を見上げた。  
「あれから3日」

夕食後、すっかり日が落ちてから、私はラルタの部屋にやってきた。ラルタの部屋はシンプルで椅子もないから、いつも私はベッドに座る。

「来るとしたら……今日ね。シャツトさんの話だとその子供に会って3日後だったらしいから」

ラルタの声もいつになく硬い。彼女は銀行とかを駆け回って金目の物を隠している間にも、いつのまにか抜かりなくシャツトさんから黒猫の情報を聞いていたようだ。

「きつと来るよ……」

そう言う私は今日寝るつもりはない。シャワーは浴びたけれど、ラルタの様に部屋着ではなくて制服を着ているのはそのせいだ。

「あのね……元はといえばあんたのせいなのよ？ 分かってる？」

「スミマセン」

そう言われればもう私はうなだれるしかない。

「じゃあ今日は戸締り万全にして、備えましょう」

いまだに罪悪感で一杯の顔をしている私にラルタの母親のティスさんは優しい笑みを浮かべてくれる。ああ、申し訳なさ過ぎて逆にいたたまれなくなる。

「母様……」

「おばさま」

「リーラちゃんのせいじゃないからね。気にしたら怒るわよ？」

でも、笑みを浮かべながらも有無を言わせないその言い方はラル

タそっくりで。彼女の気の強さは母親譲りだとはつきり分かる瞬間だ。

「……ハイ」

それでも、自分を責めないでくれるこの家の人たちの心の広さに、感動を覚える。涙が零れそうになるのを、精一杯堪えた。

「よしじゃあ各自持ち場について」

「……はいっ」

ラルタの父親のシェーマンさんが無表情で家の皆に言う。つまり彼女の性格は父親譲りということ。

ちなみに警察にはもうとくに持ち場についてもらっている。前回シャット家の件があったのでリーラの不思議な話をした途端飛んで来てくれたのである。

シャットさんには悪いけれど二番目でよかったと思わずにはいられない。勿論こんな事考えているとラルタにばれたら殺されるだろう。けど私は、これを幸運と思えないような綺麗な場所で生きてるわけじゃない。

だから黒猫退治にも参加するってディロット家の人たちを言いくるめたし、準備だつて整えてある。

さあ、絶対盗らせないわよ。どっからでもかかってらっしゃいっ！

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

ほぼ同時刻。この警備万端の家をすぐ近くの建物の屋上から見ている三つの影があった。

「ねえ………兄ちゃん、なんか楽しそうだね」

いやむしろ、そういう彼の声の方が楽しそうだった。なにせ『楽しそう』といわれた彼の表情はまたしても見えないものだから、声だけで判断するならティムの方がそうなのである。

「ティム……………この格好の時はなんて呼ぶって言った？」

その『兄やん』は声のしたほうを振り返り、楽しいとは程遠い低い声を出す。もともとかなり低い声なので、その声はドスが効いていて少し怖い。真っ向から怒られたティムは少ししよげてしまった。

「……………黒猫」

「よし」

短く肯定した彼こそまさに……………怪盗黒猫だった。

「何でわざわざそう呼ばすのさ」

少しだけ声に呆れを混ぜて、『あんちゃん』が会話に参加してきた。けれどその言い方は彼が『黒猫』と呼ばれる理由を知っていてあえて問うものだ。

「……………」

その言葉に黒猫は黙り込み……………答えるのを拒むかのようにその手に持った仮面を顔に着けた。口だけが見える銀色の仮面。正体不明の黒猫の出来上がりである。

それから彼はゆっくりと傍にあつたマントを手にとって羽織った。その時にバサツと広がったそれはまさに闇だ。

そしてその音に重なる『あんちゃん』の声。

「いい加減。もう忘れたら？ あれは仕方ないって皆言ってたじゃん」

「赦されるならな」

「……………」

そっけない言葉に、重くなる空気、そんな二人をいち早く察して、ティムが急に声を挙げた。彼はこの小ささでかなりの苦労症である。「に、にい、黒猫、どうするの？ 万全にされてるはずだよ警備」慌てて話題を変える。だが、思わず『兄やん』と呼びかけかけそうになるところが、まだまだ仲裁役としての未熟さを感じさせる。

しかし黒猫はその言葉に怒りを表しはしない。

「だったら正面から行くのみだ」

余裕たっぷりそう答える。するとティムは、何故か目を輝かせた。

「すごい黒猫！ほんとに怪盗みたい」

「ティム、もうお前喋るな」

耐え切れなくなったのか、彼は『あんちゃん』に一喝された。確かに彼の話のペースにあわせていたら、いつまで経っても話が前に進まない。

「…………ごめんなさい」

またしても、しよげるティム。黒猫はそんな彼を横目で見たような仕草をしたかと思うと、立ち上がった。

「……じゃ行ってくる。細工は頼んだ。1時間後にいつもの場所だな」

黒猫は一瞬振り返ったかと思ったら、それだけ伝え、その1秒後には屋根の上から飛び降りていた。

「了解。頑張ってね黒猫」

「……………」

その姿を全く異なった表情で見ていた二人はやがて順々に屋根から下りて行った。

#### 4・GAME START

バリイイイン

蝋燭が数本あるだけの食堂の窓ガラスが勢いよく割れた。破片がバラバラとあたりに散らばる。単なる鉄棒と化した場所から、入っ  
ていや侵入してきたのは……黒マントに黒髪に銀色の仮面の、黒猫  
だ。

怪我をした様子もなく絨毯の上に音もなく着地する。

「でたっ黒猫お！」

私はその派手な信じられない登場の仕方にかなり興奮して椅子か  
ら立ち上がる。

「ほんとに仮面つけてるのね」

対するラルタは焦るでもなく、しかもコーヒーを飲みながらのん  
びりしていた。

ちなみに私達は黒猫の入ってきた場所からかなり離れた所にいた  
ので無傷だ。

「ラルタ！ そんな暢気なこと言ってる場合じゃないでしょ！」

私は叫びながら、出来うる一番怖い顔で黒猫を睨み付ける。ただ、  
黒猫には通じなかった。むしろ、あまりの二人の反応の違いと、そ  
んな会話を聞いていたのかいないのか……微かに笑った気がした。  
が、今はどうでもいい。

この場所、つまり食堂は一番金目のものが何もないので、私達が  
守ると警察に訴えた場所だった……主に私が、だってラルタはやる  
気ゼロだから。それでも付いてきてくれるのは、きっと心配されて  
いるからだと思う。

勿論ここが進入経路だとは私も思っていなかった。つまり鉢合わ

せは全くの偶然だ。けれどこのチャンスのがしてなるのですかつ！  
「黒猫！ この家のもの盗れるなら、盗ってみなさい！！」

私は大声で宣戦布告をした。きつとこの声で警官達が来てくれるはずだ。

「……………」

しかし、そんな私の行動に恐れをなすこともなく、彼は黙り込んで止まったままだ。私は戸惑い彼に近付こうとおそろるおそろる歩を進める。と、急に黒猫は我に帰ったように、私の脇を走り去り食堂を後にした。

わ、私の横を抜けるって、どういうことっ！？ あんまり反応が早くてついていけなかった。

「あつ待ちなさい！」

それでも私は懸命にその後を追った。

「………… 馬鹿なんだから」

その姿を見て、ラルタはぽつりと呟く。逃げるものを見れば追う追う方はいいかもしれないが、見ている方はいい加減に疲れるのだ。

「まあ………… 仕方ないわね」

誰にも聞こえない声は空間に消え、消えた言葉はもう返らない。聞く者がいなければ残らない。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

食堂から出て追いかける私の目の前には今勿論黒猫がいる。そしてその目の前には大勢の警察………… がいてもよかったのに………… 何故か皆ぐうぐうと眠りこけている。傍の窓が開いているところを見ると、彼等は何かされたらしい。でも一体誰に？ 黒猫に仲間なんかいたの？

でもそれよりも黒猫の足の速さに驚く。これは確かに捕まえられないわけだ。私、結構足には自信があるのに、付いて行くのがやつとだった。中年の警察官じゃ、無理があると思う。いや勿論体は鍛えてるんだらうけど、しなやかさが違う。ってことは黒猫は結構若いんだらうか。

そんなことを考えながらも足は必死で黒猫について行つた。廊下を走りぬけて途中で見えなくなったが、角を曲がると一番豪華な扉つまりそれだけ調度類や絵画の多い大広間に黒いマントが消えるのが間一髪で見えた。当然かもしれないけど黒猫の頭の中には屋敷の図面がしっかりと描かれているらしい。

私が部屋に入ったとき、その不気味な姿は部屋の中を眺め回していた。

「さあ！ 観念なさい！」

その声に驚いたように振り返り、私を見て少しだけ口を開けた黒猫。どうしたんだらう。何かに戸惑ってるんだらうか。もしかして大方私の足の速さに？ …… 何でもいい。これはチャンスだ。

私は一気に黒猫との距離を詰め、素早く足を繰り出した。

ひゅっ

が、私の攻撃は体をひねって難なくかわされてしまった。渾身の蹴りは空を虚しく切るだけ。でもめげずに大勢を立て直して攻撃を続ける。でも、身軽な黒猫には全て避けられ傷一つ付けられない。すばしっこい。そのくせ彼は逃げない。まるで楽しまれているようだ。怒りばかりが沸き起こるままに、時間が過ぎていった。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

いくら避けても彼の息は全く上がらない。私は１５分近くやらさ

れてこんなに苦しいのにつ

大分息が上がってきた私を見て、彼は口元だけでもわかるほどにやりと笑う。ああ、はつきりと馬鹿にされた。私が爆発した怒りにまかせて飛び出そうとした瞬間。

だんっ

勢いをつけたと思ったら信じられない高さまで飛び上がり、私の頭上を軽々飛び越えていく。

「しまっ……」

そして彼が着地した先は、ある絵画の上だった。

「これは試合じゃない……ゲームだ。それを忘れたお前の負けだ」  
なんとなく感じていたけれど、やっぱり黒猫は男性だった。かなり低いアルトの声で、きつい一言をお見舞いされた。私が何も言い返せないでいるうちに、彼は絵画をどうやったのかいつのまにか壁から外して、杵ごと持ち上げている。

私が振り返るまで10秒もなかったはずなのに。

あまりに鮮やかな動きにやっと私が彼の方へと動き出したのは、黒猫が既に視界から消えた後だった。

傍にあつた窓を手品の様に入れて飛び降りたのだ。本当に猫みたいな奴だと思う。

「待ちなさい！」

慌ててその窓に駆け寄るも………既に庭には闇夜が広がるだけで、黒猫の姿はなかった。

「くっ」

私は壁に手を打ちつけて、素直に悔しさを表現するしかできなかった。分かっていた分、誰よりも有利だったはずなのに、すぐそば



にいたのにつ。

「……………盗られたのね」

気がつくと後ろにラルタが立っていた。全く驚いた様子もない。確かに今までの成功率100%の怪盗じゃ、こんな子供には捕まえられないって言う理屈は分かる。でも、でもっ分かってても捕まえたかった。

「ラルタ……………ごめん……………」

私がうなだれて声を絞り出すと彼女はこちらに向かって歩いてきた。私が、何らかの説教を覚悟した時、そっと肩に重みがかかった。おそろおそろ目を開けてみると、ラルタが私の肩に手を置いてほほ笑んでいた。

「いいのよ。それに……………あのぐらいのもの構わないわよ、ね。母様」  
そうしてラルタは後ろを振り仰ぐ。あのぐらいつて、あの絵画、300万はするんじゃない。……………お金持ちは考え方まで違うんだろ。私が呆然としていると、背後から出てきたおばさまも起こっている様子はなかった。

「ええ、それよりリーラちゃんが無事でよかった」

「怪我はないかい？」

おじさままでいたなんて！ 本当になんで心配がなかったんだろ。それとも私のシヨックが大きすぎたんだろ。うか。

「すみません……………逃がしちゃって」

本当にどうしてこんなにいい人達なんだろう。私は申し訳なくて頭を下げられるだけ下げた。すると上の空気が若干変わった。

「ねえ……………気にしないでって言わなかった？」

ゆっくりと顔を上げると、またあの有無を言わせない瞳がむけられていた。

「……………ハイ」

私が不承不承に頷くと、おじさまが溜め息をついた。

「悪いがリーラよりも悪いが警察の方が無様だろう……………なんで全員

眠りこけてるんだね？」

「睡眠薬でもまいていたのかしら？」

「そのわりには私、眠くなんてならなかったよ？」

「……」

腕を組んで考え込む私達4人。すると話声に反応したのだろうか。

「……………う……ん」

近くでうめき声が出た。見ると警官の一人が目を目を覚ましている。

私は慌てて駆け寄って起き上がるうとしていた彼に手を貸す。

「大丈夫ですか？ 何があっただんですか？」

彼は夢見心地な瞳をして遠くを見ていた。はつきり言えば目の焦点が合っていないのだ。

「見慣れない男が……………いきなり現われて……………丸いものがついたものを振ったかと思ったら皆倒れて……………気がついたら今……………みたいです、ね」

最後の方はばつが悪そうに言われた。でも私には、彼を責める気なんかこれっぽっちもない。むしろどういことだろうと、今にも答えが浮かびそうなパズルを目の前に出されたような気がして、一生懸命頭を回転させはじめた。

「……………催眠術でしょうね」

私の頭の整理がつくまえに、ラルタの落ち着いた声が出た。

確かに当てはまる事といえはそのくらいだ。私も何度か街で見たことがある。掛けられた人はまるで嘘のように……………手足をばたつかせて鳥のような動きをしたり、ものすごく熱い熱湯に平気で手を入れたり、掛けられた瞬間どんなに揺り動かしても起きなかったり……………そんな不思議な技なのだ。

「はあ……………」

「そういうことね……………」

またしてもラルタが納得したような声を出す。もうっラルタばかりずるい。

「何、何がわかったのラルタ？」

「黒猫の御告げが噂にならなかった理由よ」

「……大方催眠で忘れさせられてたのね」

おばさまの言葉に、やっと納得がいく。普段めつたなことでは何にも関心を示さないラルタだけれど、不思議がつてからずっと考えていたらしい。でも、私には、まだ分からないことがあった。

「じゃあどうしてシャットさんの奥さんは免れたの？ 確か不手際とかあの少年は言ってたけど……」

「それは多分あの人……大勢のお供なしでは絶対に何処にも行かないからでしょう？ 寝る時すらボディガードがいるもの」

ラルタが苦々しげに吐き捨てた。好き嫌いはつきりしているラルタらしい。

「さて、もう気は済んだだろう。後は私たちに任せて、二人とも寝なさい」

おじさまが私たち二人に時計を指し示す。確かにもうすぐ12時だった。でも私はまだ二階にはいけない。

「あ、あの……もう黒猫来ませんよね？」

確認というよりは自分が納得するために聞いた。今日一日で破壊された窓ガラスの修理代だけでも膨大な額だ。なのに、彼らの反応は違った。

「……さあどうだか」

おばさまとおじさまはなぜか顔を見合わせて含み笑いをする。

「お、おじさま？ おばさま？」

思わず二人の名前を読んでみたけれど……何故か答えてくれない。代わりにおばさまが私を見た後に夜空を見あげた。

「……今頃悔しがってるんじゃない？」

そして楽しそうにくすりと笑ったのだ。

ほんとにディロット家の人って本当に何考えているのか分からない

い。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

そしてその彼らはティスの言った通りに今まさに屋根の上で唇を噛みしめていた。

「くっそ……これまさか」

『あんちゃん』がありえないという声で呟く。

「ああ………そのまさかだ」

黒猫が仮面をつけたままで拳を握り締めた。

「こんな………こんな事今まで初めてだよ」

幼いティムは今にも泣きそうだ。

「なあ………お前ランダムに選んだんだろ？」

『あんちゃん』は確認するかのように黒猫を見る。

「ああ………物凄い数のギャラリーの中から」

「………こんなに手の込んだことしてるなんて」

すると黒猫は　その口元に笑みを、ただし口の端だけに浮かべた。

「そっちがその気なら。こっちにも考えがある」

そして立ち上がる。その顔はやはりわからないが、ものすごく怖いオーラが溢れていてティムは思わず『あんちゃん』に近寄る。だがその『あんちゃん』もおびえているようでティムを抱き寄せる手に力がこもっていた。

「一体………何する気？」

恐る恐る問いかける。すると黒猫はこれ以上『楽しい』という感覚を捻じ曲げて出る声はないと忍び笑いを隠そうともせず、

「ぶっ倒れるまで…………やってやるのさ」

とだけ言った。その意味が分かってティムはまた怯え、『あんちゃん』にしがみつく。

「………鬼」

あんちゃんは嘆息しながらそれだけ言った。

「鬼はどっちだよ？」

間髪入れない黒猫の声。二人の仲裁役である『あんちゃん』はこの話題から離れようと口を開いた。

「……まあそれはいいとして、例の少女はどうだったの？」

すると黒猫の周りの『楽しいこと』オーラはいくらも収まった。ティムのしがみつく力が幾分か弱まる。

「……栗色の髪に緑の瞳、確かにティムの言ったとおりだった」

「でしょでしょ」

もう怖さは感じなくなつたのか今度は瞳を輝かす少年。子供って忙しいと思わずティムを見た『あんちゃん』である。

「けど……まだ分からない。ものすごくおてんばだったし……あいっつらなんかには肩入れして」

「……そりゃ人は変わるよ」

『あんちゃんが言うものの、彼は口をつぐんだままだ。そんな彼をみて、ティムは『あんちゃん』に耳を寄せた。

「……黒猫らしくないね」

「……こういう時は人の意外な一面が垣間見えるものだからね」  
訳知り顔でそういう『あんちゃん』に対して、ティムは訳が分からないといった顔。

「……こういう時？」

「ティムにはまだ早いよ」

ぽんとティムの肩を叩く『あんちゃん』。それで話はおしまいというかのよう。

「何それ？」

不服そうな声をだすティム。けれどもそれ以上何を言っても、『あんちゃん』は何も答えてくれなかった。

「……………いぢわる」

彼のそう呟いた声を最後に三人は黙り込んだ。いや、ティムが話すのをやめたから静寂が訪れたのかも、しれない。

#### 4・GAME START（後書き）

リーラの感情が言葉になっているところは、あえてです。  
ですが、なにぶん未熟者なので、変に感じたら、感想などで教えて  
いただけるとありがたいです。

## 5・法則がねじ曲がるとき（前書き）

お待たせしました。お気に入り登録ありがとうございます。この話、ちよつと暗い展開になるのは否めないのですが、あなたのために頑張りますっ！！



## 5・法則がねじ曲がるとき

「……………もうこれで3日連続、信じられない」

休み時間だつて言うのに、私はちつとも気が抜けなかった。主語も何もないけれど、後ろの席の今は椅子を回して正面にいるラルタには分かったらしい。っていうか、分かってももらえないと困る。

「確かにね……………聞いたことないわ」

「そこよっ」

教室の後ろの席で頬杖をつきながらのんびり相槌を打ったラルタに向かって、衝動を抑えきれずに私は立ち上がった。

「一体何なのよっ毎日毎日っ！？ 黒猫ってこんなに何度も同じ家入らないんじゃないの？」

私は思いつきり怒鳴っていた。完全な八つ当たりだけど、もう我慢できない。教室にいる皆が私を見てるけど、構うもんか。

つまり、おばさまの予言が見事的中したのだ。

あの次の日も、また翌日も、黒猫はデイロツト家にやってきた。来るだけならいい。あいつはジャスト9時に来るので騒ぎが終わったあとでも十分眠れる。けれど、来ると言う事は何か盗んでいくということ。結果的にいくらおばさまに言われても私の罪悪感が消えるどころか膨らむばかりだった。

しかも同じ家に入るなんて前代未聞な話だ。相当なプレッシャーと責任を感じて妙に頭がさえてしまつて、ベッドに入った所で眠れるわけがなかった。だから、本を読んだり考え事をするしかなくて、ここ数日は朝日の観察が日課だ。

「私に聞かないでよ……………それと、ちょっと落ち着いたら？」

でもラルタが何も知らないのは当然だから、癩癩を起した私にか

なり不機嫌だった。

「……ごめん」

私は、ぎこちなく椅子に座った。

今、私達は、この街でも名門の学校の教室にいる。当然ある程度お金がないと入れない。私は普通の学校で良かったし、むしろ教育なんかいらないと主張した。でもラルタも彼女の両親もとてもなく頑固で譲ってくれなくて、結局非常にありがたいことに私はラルタと同じ学校に通っている。

だから授業中には眠れない。

たといえ財産に余裕があつたつて、通わせてもらう以上はしっかりと知識を吸収する。それがせめてもの恩返しだと思う。その精神は入学してから今までずっと続いている。でも、どんなに頑張っても成績は並の上でそれは申し訳ないと思ってる。ラルタなんか一週間で起きてる時間の方が少ないのに常に主席だし。でも、きつと世の中つてそういうもんなんだともう割り切っている。

「……きつとまた今日も来るよね」

「多分」

「……なにか私、怒らせるような事、した？」

疑問形でもラルタに聞いたわけではなく、記憶を探るように天井に目を上げ、頬杖をついて考え込む。でも、そもそも黒猫とあれ以上には接点がない。

「気にすることないでしょ？ 所詮悪党なんだから」

「……そりゃそうだけど……あふ」

知らない内にあくびが出ていた。慌てて手で口元を押さえる。けれど今はただでさえ昼ご飯を食べてもいい時間で、実際食べた。だから眠くなるというほうが無理だと思う。ただしあくまでも私以

外の人だね。

自慢じゃないけれど、私があくびを朝以外、しかも学校でするなんて、それこそ明日は雷か台風かというほど珍しいことだと、自負している。

「……眠いの？」

だからラルタも目を見開く。私は正直うんと頷いて突っ伏したかった。……出来るなら。

「なっ馬鹿言わないでよ！」

実際の私は自分の頬をつねりながら大声で怒る。そんな彼女にラルタは黒い瞳をまっすぐに向けた。

「……アンタ……ちゃんと寝てるの？」

「も、勿論……」

そう言ってるのに、ラルタは私の言い方で全部分かってしまうらしい。だってあの瞳は無理。嘘なんか付けない。絶対……それ分かってラルタはやってるんだ。

心底呆れたと言いたげな溜め息の後で、彼女はまた私を見据えた。

「今日はもういいから休んでなさい」

「なっ駄目だって！　そもそも私の責任なんだから」

私は体の前の空気を切り裂く勢いで手を振った。ラルタはその強固な意志に机に手をつけて、また私の瞳を覗き込む。

同じ目だけれど、責められてるんじゃないと分かる、少しだけ優しさを含んだものだった。

「……心配してるのよ？」

でも、ラルタの珍しく素直な言葉にも、私は意志を曲げられなかった。ゆつくりと首を振る。

「分かってるけど……やっぱり寝るなんて出来ない」

「……そう」

諦めたように私から目を離すラルタ。ええ、いいですとも、たとえ折れたと言われようと、粘り勝ちと言われようと。

「ありがとう！」

私はラルタの手を握って弾んだ声でお礼を言った。

「でも今日が終わったらちゃんと寝るのよ？」

彼女は最後に釘をさすのを忘れなかった。

「……はい」

ただ、そんな言葉がなかったとしても本当に今日が終われば私は寝ちゃうと思う。それこそ……その場にはたと倒れる勢いで。もう正直、限界……。

だから今日は何が何でも決着付けるわよっ黒猫！！

バリイイン

ジャスト9時。ご丁寧に毎日毎日違う窓ガラスを割って黒猫は侵入してくる。言い換えるならば……それがゲームスタートの合図だ。あいつがそう言ったから、私もそう考えることにした。不謹慎だから心の中だけで。

「来た！」

私は食堂の椅子から立ち上がり、音がした方へ駆けていく。ラルタは既に昼間はあんなことを言いながらも、やっぱり傍観者に徹していた。もう、そのことについては諦めている。

警察は3日目の時点で呼んでいなかった。催眠の前にはひとまわりもないから呼ぶだけ無駄だとおじさまが判断したから。でも、どうして自分たちには術を掛けないのかそれは考えても全然分からなかった。掛ければ楽になるのではないかなどと、敵のくせにふと思ったりもした。

「毎日毎日よく来るわね！」

私は黒猫を睨み付けながら、精一杯の罵声を浴びせた。ここはいつもの大広間とは違う何もない部屋だった。黒猫をいつもと違う場所に追いつめることに見事成功したのである。ここは狭くて、人が10人入れば一杯になってしまうような部屋。物置だ。

「ならいい加減本物渡せ！」

いつものように低いが、かなり怒った、落ち着きのない声の黒猫でも私は戸惑うしかなかった。彼の台詞の意味が分からなくて。

「は？」

思わず間拔けな声を出してしまった。

「とぼけるな。この家から盗んだものは全てよく出来たレプリカだ。」

「は、はああ!？」

呆れると同時にようやく分かった。そりゃあ毎晩来るわけだ。プライドずたずただしね。そう納得した途端、ふつと意識が翳ったような気がした。手の甲をつねってみただけで、寝不足で走ったせいか頭はがんがんするし、体もうまく動かない。

「なんでもいい、本物を寄せ。そうしたら、お前の前から消えてやる」

黒猫の声が、低すぎて、なんというか……とっても、気持ちいい。低い楽器を聞いているように、独特の眠気が襲う。普通なら怒気交じりの声なんかでこんなふうにはならないと、思うんだけど。や

つぱり3日半の徹夜は、ちよつと、堪えてる、みたいで。

「だったら……………見つけてみれば？」

急激に、重たくなる瞼。威厳を保たなくちゃ。そう思つて、自分の腕を強くつねる。でも、それでも、どうしようもなく眠……………い……………

「……………おい？」

「あんたがいう本物が……………どこにあるかなんて……………私は……………しらな……………」

言い終わる前にリーラの体は前のめりに傾いていた。

「おいっ!？」

その彼女の変化に瞬時に反応した黒猫が、慌てて近寄りその体を支える。

「……………」

その時既にリーラの意識はなく、規則正しい寝息が聞こえてくる。急激に重たくなる体。

「まさか……………馬鹿かお前は！」

怒鳴つたものの、すぐに呼吸を取り戻し、黒猫は彼女を抱き上げ、部屋にあつた窓から音もなく外に出た。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

「……………ん……………」

目を開けたら毛布が見えた。そして体全体に柔らかな感触がある。どうやらベッドの上にいるみたいだ。でも、部屋に明かりはついていなくて、月明かりだけが窓から差し込んでいる。それがなんだか部屋全体に不思議な空気を漂わせていた。私はベッドからぼんやりと窓に映る三日月を見ていた。普段はあまりそういうことはない

のに。

しばらくそうしていたけれど、なんだか違和感を覚えて、ゆつくりと起き上がった。その時に寝る時いつも掛けるのとは別な毛布が掛けられていることには気付いたものの、まだ意識ははっきりしないのでそれがどういうことだか分からない。

ただ、いくら暗くても、ここが自分の部屋だということは分かった。

でも、どうしてここにいるのか思い出せない。よく見たらまだ制服姿だし……。

そんなことをぼんやりと考えながら首を回した私は……そのままの体勢で動けなくなつた。

私の視線の先には、ここにいるはずのない人物がいた。しかも椅子に座つてこちらをじつと見つめている。鈍く銀色に光る仮面。

「くつ黒猫なんでこんなところ、会話の途中で寝るような奴に言われたくない」

やっと体の感覚が戻ってきて口が動くようになって、何とか搾り出した声なのに、ものすごく失礼な言葉で遮られた。怖さも忘れて腹が立つ。けれどその言葉で自分の今をはっきりと思い出した。そして同時に、確かに目の前でそんなことをされたら戸惑うなと思つている自分もいた。

でもかといってどうしてまた黒猫がここにいるのかわからない。でも、この状況からして、会話の途中で寝てしまった自分をこ丁寧にもこの部屋に運んでくれたのは黒猫らしい………なんか、おかしい気がする。でも、一応感謝はするべきなんだろうか。

「……………」

いろんなことを考えて黙ってしまった私を見かねたのか、黒猫は椅子から立ち上がった。その様を見ながらふと思う。どうして私の目が覚めるまでこの男はここにいたのだろう。しかも、捕まるのを覚悟で。いや、たとえ何があつたって、彼は捕まらない自信があるから、ここにいるんだろうけど。

……だめだ。考えがまとまらない。それ以前にわからないことが多すぎて。

「お前、まさか寝てなかったのか？」

聞いてきた彼の声は呆れた響きを含んでいた。

私はその途端、本当に何の前触れもなく、ぼやけた意識がはつきりして、体が怒りだけに支配されるのを感じた。けれどそれでも怒鳴るほどの元気はなかった。まだ体がぐらぐらするのだ。

「……寝れないに決まってるでしょ。あんたが私のせいで来て、盗られるって分かってるのに……ぐうぐう寝れるほど……鈍感じゃないんだから……」

せめて『馬鹿じゃないの?』という皮肉を込めて目一杯意地悪な口調で言っちゃった。少しだけ気分が晴れた。

「……………悪かった」

「え…………?」

彼は信じられないことに素直に謝って……こっちに向かって歩いてきた。私はその行動に驚くのも忘れて……呆れた。同時にまた冷静になって考える。まさか彼は、それを言うためだけに私の目が覚めるのを待っていたのだろうか? ……まさか、ね。

けれど黒猫はどうしたことが立ち止まるかと思ったのに、私との距離が1mになっても止まる気配がない。

「……………」



私はその様を何故か遠くからの画像で見ている自分に戸惑いながらも、またしても思考が別のものに塗りつぶされていくのを感じていた。今度のは……………恐怖だ。それもあの子供に抱いたのと同じ、でも比べ物にならないくらい強いもの。だって、相手は男性、しかも正体不明でここは寝室だ。何されるか分かったもんじやない。や、やばい。

「ちょ、それ以上、こっちに来ないで!!」

思わず足をベッドに投げ出したまま体をひねり、必死で両手を前に出して止めた。その命令に、素直に彼は立ち止まる。

「……………俺が怖いのか？」

小さな声で問いかけられた。こ、こいつは鏡というものを見たことがないのだろうか……………？

「こっ怖いに決まってるでしょう！ 特にその仮面！ それ以上近付かないで！ ……………はぁ……………はぁ」

とにかくもう見たくなくて、目をつぶって怒鳴った。すでに呼吸も荒くなっている。

対立するならまだしも、今は完全に無防備だ。しかもこの月明かりに浮かび上がる、黒い影。笑われたっていい。人間怖いものははっきりした理由なんてなかったって怖い。もう今襲われるなんてさすがに思っただけだった。それでも体はさっきよりも震えている。

「……………」

すると黒猫は、微かに顔を伏せてその仮面に手を掛けたかと思うと……………外した。私が息を呑む間に、彼はそれを床に投げる。絨毯だったから、音なんてしなかったけれど、私の中には雷が落ちたような衝撃音が鳴っていた。

「なっ……ま……」

だって、あの、間違いでなければ、仮面って言うのは、正体を隠すもので、なくなったら困るんじゃない……特にあなたは犯罪者、でしょう？

「……これでも……まだ怖いかな……」

そしてゆっくりと上げた、暗いながらも月明かりの射しこむ部屋に浮かび上がった彼の顔に、私は知らず釘づけになっていた。

## 6・何もかも飛び越えて

「……………赤い……………瞳……………」

私は見たまま口を動かしていた。

彼の目は見たこともない……………血のような赤い色をしていたのだ。てつきり黒髪だから瞳も黒かと思っていた。いや、金だろうと、青だろうと緑だろうと、こんなに驚かなかったと思う。赤い目なんて、今まで見たことない。

さらに私の予想は裏切られ続ける。もっと大人かと思っていたのにその目を見てみると、どうも私と同じ位の歳のようだ。人間の顔って、顎のラインで決まるみたいだけど、顔全体のバランスを見ないと分からないこともある。しかもその顔は美青年と言っても差し支えないくらい整っている。ただし今は無表情で、というよりもなんだか怒っているようだ。理由は分からない、けれど。

「どうなんだよ？」

なおも、不機嫌な更に低い声で聞いてくる黒猫。でもその怖さはどうしたことか半減していた。あの仮面がないせいかもしれない。

だってその瞳は、まるでルビーのようで

「綺麗……………」

私は、思わずそう呟いていた。けれど、その声が自分の耳に入ってきたとき、何を言っているのか分かって慌てて口を押さえる。

けれど、そんな私の行動も虚しく、その言葉はしっかりと黒猫にも聞こえたようだ。目を見開き、そして何故かますます距離を縮めてきたのだから。

何がどうなったのか分からない。はつきり分かるのは私はまた黒猫の機嫌を損ねたらしいってことだ。さっきより歩くりズムが速いし、その顔は完全に怒っているみたいに見える。ベッドの隅ぎりぎりまで来る瞬間に僅かに口が動いていた。けれど……小さすぎて聞き取れなかった。

「……………」

立ち止まった後は何も起こらない。思わず見上げると次の瞬間……肩に温かい感覚があった。

体の前から手を、それも両腕を回されて、それは私の背中に向かって前に垂れ下がっていた。その手は、そつと背中で組まれている。でも拘束されているとは思えない。

逃げようと思えば出来た、それに信じられないくらい優しい手だったから。それでも恐怖というものは感じるもので、心臓が苦しい。「ちよつなにする」

突然の事に体は固まりながらも声を上げると、彼の顔は予想外に近いところにあった。

「俺を、怖がるな」

上から低い声が降ってきた。命令口調だが、その声はさつきとは違って穏やかだ。でもこの状況はわけが分からない上に、怖がるなっって言われてもそれは無理がある。無意識に体が震えだした。

「何……………言って「怖がるなよ。何もしない」

私の声を遮って囁くようにそう言ったかと思うと同時に、組んだ手を外して私の腕、それも彼からは遠い方の腕を後ろに引っ張ったので、私は無理矢理彼に背を向ける状態にされた。そのまま強引に体を倒されて、倒れきる前に今度は後ろから抱きしめられる。

「やつ、やめっ……………いや……………」

なにもしないってしてるじゃない！

何より彼には得体の知れない怖さがある。その彼に訳も分からずこんなことされて……………平常心が保てる訳もない。

「ちょ……………はな……………やあっ」

声は出しているのだが、とても小さくて、何より体は恐怖から動かなくて、まるで人形のような私はこの男になすがままにされている。せめてもの抵抗にと力の入らない手で、お腹辺りにある黒猫の手を引っ張ってみるけれど……………逃れられない。

本当にこの状況は、怖い。

心臓の鼓動はもう痛いくらいで、呼吸も既に犬の様に口からしかできず、本当に息をするのが苦しい。

「頼むから少し落ち着いてくれ」

少し辛そうな声。でもそれ以上に呼吸が限界だ。

「……………な……………に……………い……………て……………」

言葉はもう、かなり途切れ途切れにしか出てこない。どんなに言われても今は無理だ。何でこんなことをされるのか分からず、荒い呼吸のまま気がついたら黒猫の方を振り返っていた。

額がくつつきそうなほど近くであの赤い瞳が揺れていた。

それはとても優しい光を放っていて……………一瞬その様に見とれてしまう。怖いものは理屈なしに怖いのも同じで、綺麗なものは、どんな状況でも、綺麗だから。

呼吸も少し楽になり、わずかだが神経も正常に動き始めたようだ。けれどそんな自分に嫌気がさして慌てて微かに動くようになった体で抵抗しながら、また口を開く。

「これで……落ち着いてなんて……いられ「リーラ」  
いきなり低い声で名前を呼ばれて戸惑って、気がついたら喋ることが出来なくなっていた。そして目の前は真っ暗。

わたしなにされてる？

「……………」

「……リーラ」

やっと開放されて……発せられた低い声に黒猫を見上げる。

「……どうし……………」

感じていたのは怒りでも憧れが砕けた絶望でもなかった。自分でも信じられないことに……今感じていたのは彼の望んだとおりの安心感と、同時にやってきた急激な眠気。

きつと……………この低い……………声のせい……………。もう……………怒る気にも  
なれ……………ない……………。

「……………」

「ごめん……………」

黒猫は自分の腕の中で眠ってしまったリーラをベッドにそっと寝かせて……………開け放した窓から闇夜に消えていった。

一方こちらはとある公園。時刻は既に夜の2時になるうとしていた  
「……………黒猫帰ってこないね」

空よりも少しだけ低いところを見ながら、そう言ったのは小さい

ティムだ。でも、この時間にこんな子供が起きているなんて絶対におかしい話で、案の定彼はゆっくり瞼をこすっていた。その目はうつろで今にでも夢の世界に旅立ちそうである。それでも待っているのは未だ帰ってこない黒猫だった。

「ああ……なんかあったのかもしれない」

『あんちゃん』も心配を足して同意する。

「……………あの子と？」

どう考えても一桁の歳に見えるこの少年がこの時間に発するはずのない冷静な声で、聞いた。けれど結局そんなティムの努力むなしく、それはまた『あんちゃん』に溜め息をつかせる結果になるだけだった。

「ティム……………これ以上余計な詮索は無用だ」

「……………はい」

するとその時、二人しかいない公園に突然現われたのは黒い影。黒い髪に赤い瞳……………黒猫だった。

「お帰り黒猫！ あれっ仮面は？」

割りとしつかりした足取りで、沢山の質問を浴びせかけながらティムが黒猫の方へと急ぐ。けれどそれを軽く手で制して、

「少し……………一人にしてくれ。それと、お前はもう寝ろ」

とだけ呟き、そのまま水のみ場のほうへ歩いていった。

「……………」

その彼の尋常でない様子に驚いたのか、ティムを公園のベンチに寝かせてから、『あんちゃん』は黒猫の元に向かった。

一人石で出来た椅子の上で、ぼんやりとしている黒猫。その横の程よく距離のある同じような椅子に腰掛けて、十分時間をとってから『あんちゃん』は口を開いた。

「…………俺にも話す気になれない？　ちょっと遅すぎたんじゃないの？」

誰もいないから静か過ぎる公園の空気は、彼の言葉が発せられてから余韻が消えるまで、時間が止まったような錯覚に陥らせる。

「……………拒絶された」

痛切な黒猫の声。その意味を分かるのは……………たぶん隣にいる男とティムだけだ。

「……ふーん…………期待してないんじゃないの？」

少しだけからかい口調になるのは…………励ますためか。

「……ああ」

「だったらなんでそんなに落ち込んでるのさ？」

「……なんでだろうな」

黒猫は微かに笑った。少年のそんな様子に胸が締め付けられるのはこの時じゃなかったらきつと見ていた全員だったはずだ。

「それで…………？」

勿論『あんちゃん』もその一人で、慎重に言葉を選んで聞く。そしてそれは、紛れもなくリーラのことだ。

黒猫は膝の上で手を組んだ。

「間違いない」

「理由は…………？」

「この目見ても……………驚かなかった。言った事も同じだった」

それが横にいた『あんちゃん』の目を見開かせるだけのものであるのは確かであるように。

「……………そりや間違いないね」

やがて彼はぽつんとそれだけ言った。すると黒猫は立ち上がる。それを追うように『あんちゃん』も立ち上がった。

「でも……………俺を全身全霊で拒絶した。」

空を見上げて呟いた黒猫。その赤い瞳はとても寂しそうで彼もこ



んな顔をするのかと彼を知るものならきつと誰もが思っただろう。

冷静沈着、神出鬼没。その姿は不幸の証

その黒猫が、実は仮面の下にこんな表情を持っているなんて。と

「……………お前のことだから説明も何にもしないで、一歩間違えば犯罪のようなことしたんじゃない？」

彼のその顔の意味も、どれほどの辛さかも分かっていて、けれど声を掛けずにはいられない。それもまたしても、あえてからかい口調。

『彼の口からからかい口調が出る』誰かを励ます』という公式が既に出てくる。

「……………」

案の定黒猫は先程の自分の行動を思い出したのか、黙り込む。確かにあれは一歩間違えば である。

「もう……………不器用というかなんと言うか……………じれったいよ見る方は」

わざとらしく溜め息までつく『あんちゃん』。じれったいというのは嘘ではないだろう。するとついに我慢できなくなったのか、黒猫は『あんちゃん』に視線を投げた。

「うるさい！」

その瞳は、興奮していて、赤いから本当に燃えているようだった。火花もはぜていたかもしれない。

「はいはい……………ただ、伝えないと……………気付かれないよ。一応言われたとおりにあの家族には、いやあの子にはなんにもしないけどさ……………」

ディロット家の推理通り、『あんちゃん』は術師だったようだ。そして、ここに密かにリーラの疑問も解決される。

「悪いな……………」

瞳の炎を押さえ込んで黒猫が無理な笑みを浮かべる。

「どう致しまして」

『あんちゃん』の声が明るく鳴る。これまでの会話からしてどうも彼は黒猫と親友の位置にいるらしい。一方的でもなく、かといって距離を置くでもなく……。

「俺と関わったらくなことにならないって分かってるのに…………目の前のあいつ見てたら…………拒絶に耐えられなくて…………気付いたら…………」

呟くように囁くように告げる黒猫。

「…………俺はいいと思うけどな。そういう素直さ。そのせいで確信持てたんでしょ？ それに俺は今不幸だとは思わないし」

「……………」

「いい加減赦してあげたら？ 自分を」

少し呆れを込める。それはおそらく何度も何度も彼が黒猫に行ってきたことなのだろう。彼にとっては黒猫が自分を許さないのは百も承知であり、でもあえて言うのだ。言わずにはいられないのだ。

彼に苦しんで欲しくないと望むからこそ。

「…………赦されていいはず、ない」

けれど黒猫は低い声でそう呟くだけだった。今日もまた、彼の罪悪感を意識させるだけで終わってしまったようだ。

「ほんと…………優しいんだから」

そう言っしかない『あんちゃん』は、ふつと息を吐くと立ち上がる。

「誰が？」

聞いて来る黒猫。絶対に答えはわかっているくせに『言えば殺すと目が言っていた。』

「さあね」

そう言い残して『あんちゃん』は黒猫の傍を離れていく。振りかえることはない。

「……………」

残された黒猫はまた空を眺め始める。

その赤が見ているのは、一体何なのだろう？

（できれば今回は、あとがきをお読みください）

## 6・何もかも飛び越えて（後書き）

赤い瞳というのは、実際にあります。しかし、遺伝子上の病気であります。

ただ、小説の場合は、特別な感じを出したい時によく使われます。ですから勿論この話でも差別するつもりはありません。ただし、赤と言う色の特性上、黒猫は苦しんでもいます。気分を害されない様にあらかじめ申し上げておきますが、この話は実は、設定をとある漫画に似せて作ったもので、クォーター的に二次創作なんです。赤いと言うのもそこから来ています。転載するにあたって、他の色も考えましたが、紫や灰色では、これから黒猫がやっていくことに、どうしても納得がいきませんので赤いままでやりたいと思います。もしも、苦情などありましたら、紫に変えます。ご理解ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5694y/>

---

True Night

2011年11月24日19時52分発行